

里山ボランティアを支える仕事 ～川崎—仙台薪ストーブの会を事例に～

Energizing Work of Satoyama Volunteer

学籍番号 47-086843
氏名 塩原 大介 (Shiobara, Daisuke)
指導教員 鬼頭 秀一 教授

1. 研究背景

今日、日本において森林は多くの価値を有しているとの認識が強まっている。森林には生物多様性の維持、物質の生産、水源の涵養、保険休養の場の提供など価値があり、それらを「多面的機能」として捉える視点がある [林野庁, 2005]。

しかし日本では現在森林荒廃が叫ばれている。理由として、森林保全を担ってきた林業(薪炭業を含む)の衰退により、それまで維持されてきたシステムが崩壊したことが考えられる。

森林保全の担い手として、市民セクターが注目されており、そのような市民の活動を捉える議論に森林/里山ボランティアがある。森林/里山ボランティア論において想定される市民とは、「森林の保全を目的として、善意から自発的な活動をおこなう人」であった。

しかし、松村正治は、ボランティアを生態学的に望ましい管理の担い手として捉え、ある一定の方向に導こうとする政治的な力作用を生態学的ポリティクスと呼び、市民が自然と取り結べる多様なかわりの幅を狭めるものであるとして批判した [松村正治, 2007] [松村正治, 2009]。松村は、典型的なボランティアの失敗例として扱われる

東京都立桜ヶ丘公園を事例に、そこで里山ボランティアに参加する人々の参加動機が実は生態系の保全よりもレクリエーションや運動などの自己充足的な動機であることを明らかにした。そして、松村はそのような動機から参加するボランティアたちが、活動によってそれぞれの生活の質が高められているのだとすれば、それを生態学的ポリティクスによって正す必要はないと説いた。

このような松村による森林/里山ボランティアへの批判的な議論は、市民による活動を新しく捉え直す視点を示唆するものであるが、議論としてはまだまだ不十分であるといわざるを得ない。なぜなら、松村の里山ボランティア論は参加者の一時的な動機のみを分析の対象にしていることから、活動が必ずしも環境保全を第一の目的とするような社会システムに動因されない可能性の指摘以上のものではなかったのである。

2. 問題の所在と研究の目的

松村が里山ボランティア論において「生態学的ポリティクスに抗う」、あるいは「社会システムへの水路づけに抵抗する」と表現するような市民の活力は、確かに現場から感じることができる。それは、トッ

プダウンによる里山の管理に動因されるものではなく、人々が自らの生きかたをたえず問い直し、よりよい生き方を模索し、行動へと移していく人間活動における市民の活力であると言えよう。このような活力は、市民が環境保全活動へとかかわる中で育まれる「政治的コミットメント」[井上有一, 2009]によるものに他ならない。そのような市民活動の側面は、これまで議論されてきたような環境ボランティア論、あるいは森林/里山ボランティア論の枠組みでは捉えきれない部分なのである。そのような部分を含めて、実際に現場で展開する市民活動を包括的に捉えることのできる新たな学問的視点が必要であり、そのような視点を提示することを本研究の目的とする。

3. 調査事例の概要・調査方法

調査対象地域

宮城県柴田郡川崎町（仙台市から車で約1時間）、人口 10,583 人（2005 年）、面積 270.80km²、うち森林面積 21,595ha(総面積の約 80%)。

調査対象者、および調査方法

川崎町の資源をいかす会(以下、「いかす会」)、およびその下部組織である川崎—仙台薪ストーブの会(以下、「薪ストーブの会」)の会員への聞き取り調査、活動への参与観察。川崎町森林組合への聞き取り調査。文献調査。

団体概要

いかす会は H.12 年に「川崎町の豊かな自然を想い、楽しみながら長期的に食料とエネルギーの自給を目指す」という理念のもと、地元の住民が主体となって発足した市民団体である。

H15 年、会の活動が国交省の釜房ダム水源地域ビジョンへと取り入れられ、いかす会は NPO 法人化、視野を流域へと広げた。その後、流域を視野に入れた環境保全活動を対外的に示すことで国や企業から助成を受けることで活動を継続させている。

いかす会にはきのこ、菜の花、炭などいくつかの部会があり、いかす会の理念に基づいた活動をそれぞれ行っている。そして H19 年にできた最も新しい部会が薪ストーブの会である。

薪ストーブの会は、薪の生産を通して森林の保全を行う団体である。生かす会の他部会と比べると、構成員が流域圏の都市住民(仙台市、名取市など)であることと、会員数が多いこと(いかす会約 200 名のうち約 100 名が薪ストーブの会所属)が特徴である。

4. 薪ストーブの会の活動

薪ストーブの会は、会員による薪の自給活動として、具体的には、伐採、玉切り、搬出、薪割り、乾燥、そしてそれに付帯する環境整備を行っている。

活動には、自分の薪を生産する A 作業と、会の薪の生産にかかわる B 作業とがあり、その概要は表の通りである。活動期間である 9 月から 3 月の間には、会員大勢で B 作業を行う毎月一回の定例会がある。

5. 薪ストーブの会のしかけ

5. 1 薪ストーブ

「薪ストーブのある生活」などのスロガンとともに雑誌などで特集されることが増え、薪ストーブは現在多く普及するに至った。薪ストーブを導入したはいいが、薪の調達に思ったより悪戦苦闘する人がネッ

トや新聞などのメディアを通じて薪ストーブの会に入会するというのもっとも多い会員の入会のパターンである。つまり薪ストーブは、薪を得なければならないという状況を作り出し、そのために人を薪の調達などのための行動を起こさせるしかけなのである。

5. 2 地域通貨「きもち」

会では薪の交換などに「きもち」と呼ばれる地域通貨がやりとりされている。作業の対価に現金が用いられるのではなく「きもち」という通貨が用いられることで、活動に対する会員の多様な価値が生まれてきているということである。「きもち」には薪1束(=市場価値約400円)の価値があるとされているが、人によっては「もっと違う価値」があると考えられている一方で、「必要性は感じていないがもらえるならもらっておく」、あるいは「老後の貯金」としてとっておくなどの価値の多様性が見られるのは、それが現金ではなく「きもち」ゆえであると考えられる。そして「きもち」に対してそのような多様な価値を別の人が持っていることも会員はわかっているのである。

5. 3 アカデミックな香り

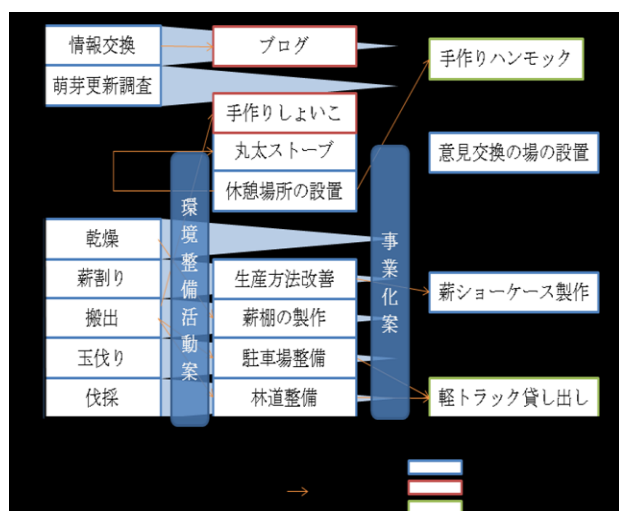
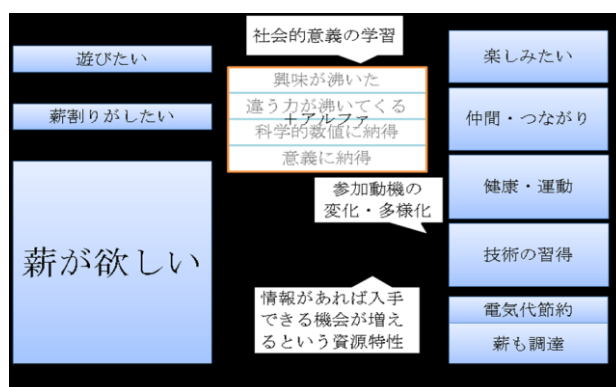
薪ストーブの会では、このように薪の生産活動が同時に環境的な意義を合わせ持っていることを内外に向かって積極的に情報発信をしている。会の活動の環境効果は、調査報告書やニュースレターなどのメディアを通じ、目に見えるかたちで会員に伝わるようになってきている。また、そうした環境効果によって会の正統性が担保されることで、そのような活動を柱にいかす会は企業や行政などに対し助成金の申請などをより

スムーズに行うことができるのである。

これらのように、薪ストーブの会にはいくつものしかけがありそれぞれが会の運営や存在意義にかかわるといふ点で会の活動になくてはならないものである。しかしその一方で、同時に会員の活動への参加を精神的に支えている部分も多く、それらのしかけが有機的に作用し合うことによって会員を活動に引き込み、また活動に幅や深みを持たせていく契機を作り出しているという側面も持っていると考えられる。

6. 薪ストーブの会の展開

薪ストーブの会は、会員の動機の変化に合わせて、その活動も多様化している。



7. 理論的考察

松村は、最終的に里山ボランティアのこのような側面を、「広義の社会福祉サービス」として位置づけている。この概念の明確な定義は示されていないが、「広義の社会福祉」という部分に関しては、人々の自己充足感、あるいは生の豊かさをささえるような広い意味での福利を表しているとして捉えて差し支えないであろう。しかし問題は、それを「サービス」と呼ぶことで、その人々の営みから市民活動やボランティアという色合いを消してしまっていることである。つまり、余暇を楽しく山で過ごすことと、楽しくゲームセンターで遊ぶこととがどう違うのか、という点が説明されなければ、ボランティア論あるいは市民活動論の中に自己充足的な動機から参加する市民の意義を位置づけるには不十分なのである。

薪ストーブの会の活動は、単にボランティアなのか、あるいは単に賃労働なのか、という問いによっては捉えることのできない市民の活動である。したがって、このような市民活動を捉えるためには、一度活動を「人間としての営み」というレベルまで引き下げて捉えてみるのが有効である。

「遊び仕事」という概念は、「合理化」や「合理性」という近代的な労働のありかた、あるいは単に給与を得る（＝稼ぎ）という労働のありかたではなく、また、従来言われてきたようなボランティアのように、有意義な余暇を過ごすための活動というような二元的な考え方を克服するような射程を持つ議論なのである。地域通貨である「きもち」は、そういった「稼ぎ」でもない、「ボランティア」でもない活動の捉え方を会員に許容する装置として機能しているの

である。しかし、そのような二つの軸では捉えきれない、さらなる側面がまだ存在している。それは、経済的な意味を持つ「仕事」とは別の、人との関わりの中で初めて意味をなす、「仕事」の側面である。

8. 結論

薪ストーブの会は、会の問題や会員の参加動機の多様化を背景に活動を発展させている。現状においてこのような活発な活動の展開や発展を支えているものは一体なのか、という問題関心から、市民活動を捉える新しい視点を提示する。

一つ目の側面は、それが会員にとって楽しみとなっている「遊び」の側面である。これは、活動への参加を通して、会員に精神的な意味を与える。

二つ目の側面は、それが会員の物質的なニーズを充たす、つまり燃料である薪を得るなどの経済的な「仕事」の側面である。

そして、もう一つ活動を支える側面を見ることができた。それは、さまざまな関係の中でなりたつ社会的なもう一つの「仕事」の側面である。市民活動においてこの側面を捉えることで、これまでのボランティア論において閉塞的に論じられていた「生態学的ポリティクス」と「自己充足的な動機」の二項対立図式を乗り越えることができるのである。

<参考文献>

- 林野庁『林業白書』 2005.
松村正治.2007.「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方」『環境社会学研究』 13: 143-157